

「読む能力」を高める指導法の研究

－文学的な文章の「比べ読み」を通して－

教科研究室 沖田浩史

【要 約】

PISA調査など様々な調査の結果、読解力の低下が指摘され、国語科においては、「読む能力」を高める授業改善が求められている。そこで、意識調査から明らかにした課題を踏まえ、文学的な文章の「比べ読み」を通して、文章を評価、批評する能力を育てる授業実践を行った。一人一人の「読み」を伝え合い、読み取ったことを相互評価する活動を繰り返す中で、生徒は主体的に作品の読解に取り組み、作品を読む視点を広げることができた。

【キーワード】 国語 読むこと PISA型「読解力」 比べ読み 相互評価

1 研究の目的

平成15年に実施されたPISA調査の結果が公表されて以来、様々な研究及び研修の場面で、児童・生徒の「読解力」の低下が、話題として取り上げられることが多くなった。国語科においては、「文章を読み解く力」に加えて、「考える力、感じる力、想像する力、表す力」「文章を理解し、評価する力」を、「読むこと」を通して総合的に高めるための授業改善が求められている。

複数の文章や作品を読み比べることは、「読む能力」を高めるのに有効な言語活動である。題材、内容、ものの見方や考え方など、いろいろな観点から「比べ読み」を行うことで、自分の考えを深めるだけでなく、文章や作品そのものを評価する力を養うことができる。生徒の読書の範囲を広げることもできる。その際、読み比べる作品の選定や、比較の観点の設定が重要となるであろう。

本研究では、主に中学生、高校生を対象に、教材としてよく取り上げられている文学的な文章の「比べ読み」を通して、「読む能力」を高める指導法を研究することとした。特に、作品を理解するだけでなく、作品や作者を評価する力を養うことを目的とする。また、自分の考えを更に広げたり深めたりするために、「書くこと」の学習や読書活動と関連させる指導法も探りたい。

2 研究の内容

(1) 「読む能力」を高めるための授業改善

ア PISA型「読解力」についての分析と課題

PISA型「読解力」とは、文章や資料から情報を取り出すことに加えて、文章や資料を解釈し、評価し、自分の考えを論述することを含むものである。平成15年に実施されたPISA調査の結果、文章や資料を読み取って、自分の考えや、自分がそのように考える理由などを長めの語句で答えさせる、自由記述型の問題の無答率が、他国と比較して高いという課題が明らかになった。

この結果を受けて、平成17年12月、文部科学省は「読解力向上プログラム」を取りまとめた。その中で、「読

解力」向上のための、各学校における取組として、三つの重点目標が示されている。特に「読むこと」においては、「テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実」が目標として掲げられ、文章の内容だけでなく、筆者の意図などを解釈するような「読み」の授業改善が求められている。

また、平成19年4月に実施された、全国学力・学習状況調査においても、自分で解答を練り、文あるいは文章で解答する、記述式の問題が多く取り入れられた。記述式の問題を作成するに当たって、出題者は、説明や解釈をする、評価や批評をする、感想や意見を述べる、という三つの視点を挙げている。

「読むこと」の授業実践において、①文章を理解・評価すること、②文章に基づいて自分の考えを書くこと、という二つの言語活動を取り入れることによって、PISA型「読解力」の向上を図ることができると考える。

イ 児童・生徒、指導者の意識調査

「読むこと」の授業について、県下の指導者がどのような意識を持っているかを調査した。

調査対象：小学校102名、中学校51名、高校71名の 国語の指導者 調査期間：平成17～19年

国語の3領域のうち、最も力を入れて指導すべき領域は何かという問いに対して、平成17年の調査では、「話すこと・聞くこと」の領域であるという回答が最も多かったが、平成19年の調査では、「読むこと」の領域であるという回答が最も多いという結果になった(図1)。読解力の向上に対して、指導者の意識が、次第に向けられてきていることが分かる。

また、「読解力向上プログラム」について尋ねたところ(平成19年の調査)、大体的内容を知っているという指導者は全体的に少なく、特に、高校の指導者に、知られていないという結果になった(図2)。今後、教育センターにおける研修など、様々な場面で、「読解力向上

プログラム」について広めていく必要がある。

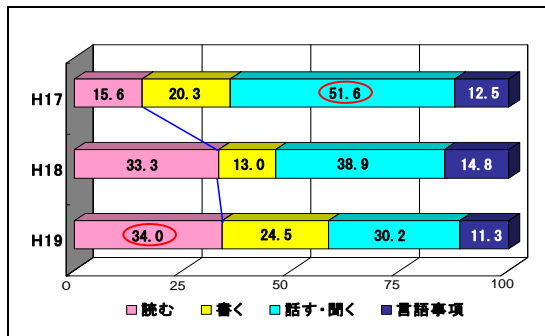


図1 最も力を入れて指導すべき領域は (%)

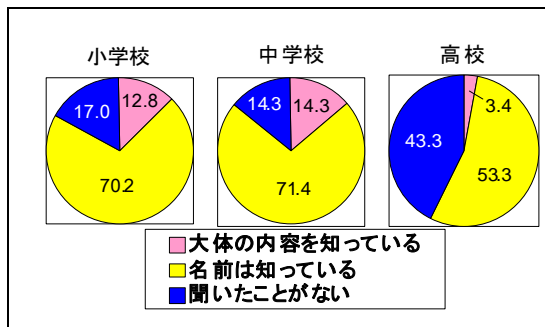


図2 「読解力向上プログラム」について (%)

また、平成19年4月に実施された全国学力・学習状況調査によると、小学校では、「国語の授業で、二つ以上の資料や文章を比べて読んだり調べたりしている」と答えた児童は45.5%、中学校では、「国語の授業で、友達と話し合ったりして意見を交換する場が多い」と答えた生徒は39.9%という結果であった。

さらに、高校生や高校の指導者を対象とした、平成17年度教育課程実施状況調査では、「文学的な文章を読むこと」「自分で話したり書いたりしたものを、自己評価したり、生徒同士で相互評価したりすること」について、指導者が思っているほど、生徒はよい印象を持っていないということが明らかになった。

「読むこと」の学習において、「比べ読み」「自己評価、相互評価」は、生徒の「読む能力」を高めるのに、効果的な学習活動である。「読むこと」の授業において、文学的な文章を読み比べ、生徒相互に、気付いたことを伝え合い、評価していく活動の在り方について検討し、授業実践に取り組んでいく必要があると考える。

ウ 授業改善の方向性

PISA調査の結果や、児童・生徒、指導者を対象とする様々な調査結果から、「読む能力」を高めるための授業改善の方向性として、次の三つを挙げることができる。

- ①学習者が考え、書いたものを互いに評価する授業
- ②文章が効果的かどうか、評価、批評する授業
- ③学習者一人一人の答えを尊重する授業

従来行われてきた、講義型、問答型の授業に加えて、

「学習者が、文章を読んで考え、自分の意見を書き、書いたものを通して自分の考えを伝え合い、評価し合う」という「相互触発型」の授業を、効果的に取り入れることが重要であろう。その際、指導者は、「相互触発」の過程の中で、適切な支援をしていく必要がある。図3は「相互触発型」の授業を模式的に表したものである。

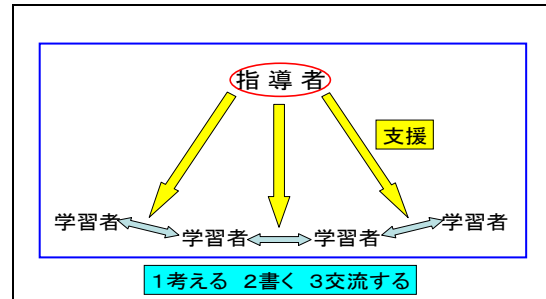


図3 「相互触発型」の授業

本研究における授業実践では、複数の作品を読み比べて、作品や作者を評価し、その活動の中で、自分が気付いたことや自分の考えを書き、書いたものを評価し合うことで、「相互触発型」の授業の実現を目指したい。

(2) 「比べ読み」の授業実践

ア 「比べ読み」の学習効果

複数の文章を読み比べる過程で、学習者の「読み」の視点は、文章の共通点と相違点に、おのずと向けられることになる。「比べ読み」は、次の三つの学習効果が期待できる言語活動であると考えられる。

- ①指導者からではなく、学習者自身によって、多様な気付きが生み出される。
- ②個人の気付きを伝え合い、共有することを通して、学習課題が主体的に設定され、文章を理解、批評する態度が養われる。
- ③文章の主題や表現意図などを読み取ることが容易になり、作者の視点を通して、文章を読むことができる。

イ 「比べ読み」についての実態調査

今年度、教育センターに研修に来られた先生方の協力を得て、「比べ読み」についての実態調査を行った。

調査対象：小学校47名、中学校29名、高校31名の
国語の指導者
調査期間：平成19年6月～11月

その結果、93.4%の指導者が、「比べ読み」を実践したことがあると回答し、そのうち、66.7%の指導者が、効果があったと回答した。また、どのような文章と「比べ読み」をしたことがあるか、という問いに対しては、「同じ作者の物語や小説及び詩を教材として、比べ読みを実践したことがある」という回答が多く挙げられた。また、中学校、高校では、古典と関連させた比べ読みが、多く実践されていることが分かった(図4)。

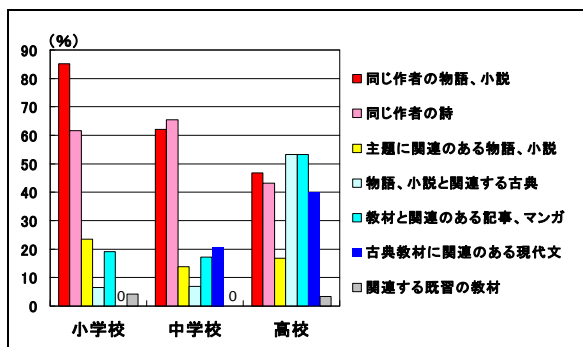


図4 どのような文章と「比べ読み」をしたことがあるか(複数回答)

本研究においては、中学校と高校の連携を考えているため、中学校、高校で扱われている同じ作者の作品を読み比べることにした。

ウ 題材の選定

小学校、中学校、高校の教科書で、最も多くの作品が取り上げられているのは、宮沢賢治である。小学校では「雪わたり」「やまなし」、中学校では「注文の多い料理店」「オツベルと象」、高校では「よだかの星」「なめとこ山の熊」「紫紺染について」「永訣の朝」などが教材として取り上げられている。そのうち、授業実践を行う中学校と高校で使われている教科書に掲載されている、「注文の多い料理店」と「なめとこ山の熊」の比べ読みを実施した。

同じ作者の作品で、すでに学習した教材、あるいは将来、学習する教材を読み比べることは、次の四つの学習効果があると考えられる。

- ① 作者が書き続けたテーマが理解できる。
- ② 作者独特の表現に気付き、その効果が理解できる。
- ③ 作者が意識している読み手の存在が理解できる。
- ④ 過去(将来)の自分の読みと比較できる。

エ 「比べ読み」の実際と相互評価

「比べ読み」の実践に当たっては、図5のワークシートを活用した。授業の概要は、次のとおりである。なお、図5の①～④は、概要の①～④に対応している。また、中学生も高校生も、同じ実践を行っている。

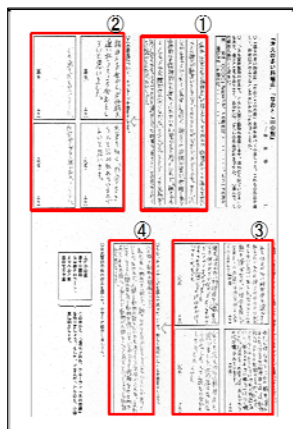


図5 「比べ読み」ワークシート

- ① 「注文の多い料理店」「なめとこ山の熊」を読み比べて、どちらが好きであるか、また、そちらを選んだ理由について、自由に記述させた。書くことに対する抵抗感を軽減させるために、書く「型」を提示した。
- ② 作品に対する友人の意

見について、相互評価させた。この活動が、相互触発の一つめの場面である。

- ③ 中学生には高校生から、高校生には中学生から評価を受けるようにした。この活動が、相互触発の二つめの場面である。
- ④ クラスの友人、校種の違う生徒からの評価を受け、新しく気付いたことをまとめさせた。

特に、③で実践した、学年を超えた取組は効果的で、生徒たちは、読み手を意識して書くようになり、評価する方も真剣に取り組んでいた。また、数多くの生徒と交流することによって、多くの「読み」に触れることができ、ものの見方や考え方が広がった。

この実践において工夫した点は、次の三つである。

- ① 相互評価の場を多く設定した。
- ② 書く活動をできるだけ多く取り入れて、交流させた。
- ③ 相互評価に当たっては、指導者が適切な支援をした。

「比べ読み」の相互評価を通して、生徒が変容した一例を紹介する。

高校生Aの最初の意見

○私は、「注文の多い料理店」が好きです。その理由は、料理店からの注文を若い二人の紳士が勘違いしていく、そのやりとりがおかしかったからです。

高校生Aの感想に対する中学生の評価

○「注文の多い料理店」の方は、動物を殺すことがストレス発散のようだったので、物語とはいえ、命をそのように扱うのは少し嫌でした。

高校生Aの、相互評価を終えての感想

○私は単に物語を読んで、紳士のやりとりがおもしろいなぐらいにしか思っていなかったけれど、人間と動物の殺し合いでもあるなど気付かされた。

高校生Aは、中学生から評価を受けることで、最後には、主題に迫る読みができています。

指導者は、全生徒の意見の中から、主題に迫ったり、表現効果に触れていたりするような内容のものを選び出して紹介し、そこから新しい気付きが導き出せるよう支援した。例えば、次のような意見を全生徒に提示した。

中学生の意見

「注文の多い料理店」

○死んだ犬が生き返って二人の紳士を助けたのがすごい。

「なめとこ山の熊」

○熊と小十郎が心を通じ合わせるところがいいと思った。

高校生の意見

「注文の多い料理店」

○二人の紳士が素直すぎるので、違和感を覚えた。

「なめとこ山の熊」

○作者は、自然、動物との共存は大切だが、それがいかに難しいことであるかを伝えたかったのだと思う。

また、中学生の書いた意見に対して、高校生が「せっかくいい意見が書けているのに、読みにくいのが残念である」という趣旨の評価をしたところ、その中学生は、丁寧に書き直していた。「書くこと」においても、相互評価することの学習効果は高いということが分かる。

相互評価を終えて書いた感想の一部を、紹介する。中学生の感想には、「高校生のメッセージの中に、『どちらも動物が深くからんでくるのに、全く方向性の違う話の内容』と書いてあり、なるほどと思った。このことを照らし合わせながら、もう一度読んでみたい。」など、新たな読書意欲がわいたという感想が多く見られた。また、「メッセージをくれた高校生の文章全部がうれしかった。」という感想も見られた。

また、高校生の感想には、「紳士たちのこっけいな姿が、この物語にあまり残酷さを感じさせない役割を果たしている。」「なぜ宮沢賢治は、小十郎を死ぬ設定にしたのか、調べたい。」など、作者の意図に注目した感想が多く見られた。

オ 生徒の変容

生徒の「読む能力」の変容について、「比べ読み」を通して生徒が書いた感想を基に、分析した(図6)。

「比べ読み」実施後の感想		
(単位%)		
授業実践の対象者	中学1年生 51名	高校1年生 71名
自分の観点で、作品を批評している。	74.5	85.1
作者の意図に、目が向けられている。	5.9	31.3
メッセージのやりとりを終えて	↓	↓
作者の意図に、目が向けられている。	33.3	71.0

図6 生徒の「読む能力」の変容

二つの文章を読み比べた最初の段階で、作品を批評していた感想が、中学生も高校生も数多くあり、「比べ読み」を通して、文章を評価、批評することができるということが分かった。また、自分一人の「読み」の段階では、主題や表現意図など、作者の意図に着目できている感想は少なかったが、相互評価することによって、多様な「読み」に触れ、そのことを通して、作者の意図に着目できるということが分かった。

しかし、中学生にとっては、多様な「読み」に触れた後でも、作者の意図に着目することは難しく、更に新しい課題を設定した。「注文の多い料理店」については、「紳士たちの、紙くずのようになった顔は、なぜ、元に戻らなかったのか」、「なめとこ山の熊」については、「母熊と子熊のシーンは、なぜ、作品の中に入れ込まれたのか」など、作者の意図に着目させるテーマを設定し

て、自由に記述させた。高校生にも、同様に課題を設定して記述させ、生徒が読み取ったことについて、主なものを選び出し、全生徒に紹介した。

カ 読書活動を広げる実践

「比べ読み」の実践後、中学校においては、読書活動を広げる実践として、本の帯紙作り、指導者によるブックトークを実施した。いずれも、宮沢賢治の他の作品を読み比べさせることを目的としている。

本の帯紙作りにおいては、グループごとに、「セロ弾きのゴーシュ」「度十(けんじゅう)公園林」「よだかの星」「オツベルと象」「鳥の北斗七星」の作品から一つ選び、グループで話し合っ、本の帯紙を作らせた。図7は帯紙作りの様子、図8は、作った帯紙を相互評価している様子である。いずれも書く活動を取り入れた。



図7 帯紙作りの様子



図8 帯紙の評価の様子

(3) 今後の学習展開

今後、実践できる「比べ読み」の例として、小学校教材と読み比べさせること、テーマの類似する評論文と古文を読み比べて小論文を書かせること、などが考えられる。その際、クラスや学年を超えて相互評価させることで、生徒は多様な「読み」に触れることができ、読み手を意識して自分の意見を書くことができると考える。

3 まとめと今後の課題

「比べ読み」を中心に、生徒の「読む能力」を向上させる実践に取り組んできたが、成果として次の三つを挙げる。①「比べ読み」を通して、作品を読む生徒の視点が広がった。②相互評価を通して、生徒が主体的に読解に取り組んだ。③「比べ読み」の対象として、作品だけでなく、生徒が書いたものも読み比べることができた。

今後の課題は、「比べ読み」など、読解力向上のための授業実践を、各教科に広げていくことである。「国語力」は学習・生活の基盤である。全教科を挙げて「国語力」の向上を目指していかなければならないが、国語科には、その中心的役割を担うことが求められている。

主な参考文献

- 三浦和尚 『「読む」ことの再構築』 三省堂 2002
- 大村はま 『大村はま国語教室4 読むことの指導と提案』 筑摩書房 1983
- 日本国語教育学会編 「月刊国語教育研究」 2006年9月号